

令和 5 年 5 月 3 日現在

機関番号：14701

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03248

研究課題名（和文）近世・近代における地理学と国際主義の接合とその意義

研究課題名（英文）Articulation and its significance between geography and internationalism in the early to late modern era

研究代表者

島津 俊之（Shimazu, Toshiyuki）

和歌山大学・教育学部・教授

研究者番号：60216075

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、広義の知的営為としての地理学と、思想・実践としての国際主義とが、近世・近代においてどのように接合してきたか、そして、その接合はいかなる意義を有するものであったかを探究した。地理学は全地球の記述として出発したため、定義上、国家やその領土を超えた研究の視野を有する。一方で国際主義は、主権国家の成立に伴って逆説的に生成してきた。地理学と国際主義との接合は、全くの必然でもなければ全くの偶然でもなく、近世から近代にかけての国民国家形成のなかで、時空間的な多様性を有しつつ展開してきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

地理学と国際主義との関係性は従来自明視され、あまり顧みられることがなかった。また、国際主義の一般的イメージは「リベラル国際主義」に偏り、「ヘゲモニー国際主義」や「革命的国際主義」についての理解が充分とはいえない。本研究ではパリやロンドンを事例として、アート（芸術作品）を媒介として地理学とヘゲモニー国際主義が偶発的に接合してゆく様態の一端を解明した。また本研究では、地理学と国際主義の関係性を19世紀後半に遡って理解することの重要性と意義を呈示することができた。

研究成果の概要（英文）：This study explored the articulation and its significance between geography as an intellectual enterprise in broader sense and internationalism as idea and practice in the early to late modern era. By definition, geography has acquired a broader scope of inquiry beyond the nation and its territories as geography had begun as the description of the whole earth. On the other hand, internationalism has emerged paradoxically along with the establishment of the sovereign state. The articulation between geography and internationalism has been neither inevitable nor accidental. Their interrelationships have evolved in a spatially and temporally variable manner in the course of the nation-state formation in the early to late modern era.

研究分野：人文地理学

キーワード：地理学史 国際主義 アート 19世紀 パリ ロンドン マリアンヌ・ノース

1. 研究開始当初の背景

アレクサンドリアで活躍したプトレマイオスは、2世紀前半に著した『地理学』においてグローバルな地球誌としての Geographia とローカルな地域誌としての Chorographia を区別した。アムステルダムに住んだワレニウスは、1650年刊行の『一般地理学』において Geographia Generalis と Geographia Specialis を区別し、後者を Chorographia 及び Topographia を含むものとした。地理学はその構築の全過程を通じて、グローバルな地球誌とローカルな地域誌の双方を含みこむ思想・実践として概念化されてきたのである。しかし、地域誌が専ら一地域の個性記述に終始する存在とみるのは正しくなく、むしろローカルな地域誌の連続体こそがグローバルな地球誌の基盤となりうるものであった。地球誌と地域誌の区別は研究対象たる地表のスケールの階層性に基づくものであり、両者は常に相補的な存在として概念化されてきたのである。

かかる地理学の長い過去からみれば、地理学と国際主義の接合はシームレスかつ自明の事柄のようにみえる。国際主義とは internationalism の訳語であり、一国の枠組みを超えた交流や協調を重視する立場を指す。しかし internationalism の語中に nationalism が潜むように、国際主義の生成は全地球を覆う国家群システムの発達と無関係ではありえない。プトレマイオスからワレニウスに受け継がれたスケールの階層性への配慮は、地理学が国際主義と接合する素因をなした。しかし、かかる接合の動因は主権国家体制の確立や国家群システムの発達といった外的状況に求められねばならず、かかる素因と動因のコンビネーションも時間と空間の中で変異しうる。ここに、地理学と国際主義の接合を自明視せず、時空間的に変異しうる偶有的なプロセスとみなし、両者の関係性を再審に付すという研究課題が浮上することとなったのである。

かかる研究課題の着想に至ったのは、研究代表者が2001年度以降科研費助成金や福武財団助成金を得て、主に日本とヨーロッパを対象とした地理学史研究に取り組み、研究成果を国際的にも発信してきた経験によるところが大きい。この取り組みは、空間や場所に関わる多様な思想・実践を空間や場所に再帰的に位置付けて検討する近年の地理学史研究の国際的動向に沿ったものであった。特に、本研究課題の直接的な出発点となったのは、2014年のIGU(国際地理学連合)クラクフ地域会議において、ミラノ・ビコッカ大学のエレナ・デラグネーゼ(Elena dell'Agnese)教授とともに、政治地理学コミッションと地理学史コミッションのジョイントセッション“ What (Political) Geography Ought to Be? Theoretical Approaches to and Historical Perspectives on Geography and Geopolitics as Instruments of Peace ”を共同オーガナイザーとして主催したことにある(8月20~21日)。研究代表者はこのセッションで“ War, Peace and a Geographical Internationalism: The 1871 Antwerp Geographical Congress as a “ Peace Festival ” after the Franco-Prussian War ”と題する発表を行い、翌年フルペーパーを英文で公表した(*Geographical Reports of Tokyo Metropolitan University*, No.50, 2015, pp. 97-105)。この論文は現在に至るまで国際的に引用され、当該テーマに関する先駆的論文の一つとみなされている。研究代表者はまた、2015年7月にアントワープで開かれた第26回ICHC(国際地函学史会議)への参加を契機として、19世紀中葉の日蘭関係及び白蘭関係における「ヨーロッパアトラス」の役割に関する論文(*The Modern Atlas as Diplomatic Gift: Vandermaelen's Atlas de l'Europe and Dutch-Japanese Relations in the Mid-Nineteenth Century*)を、ベルギーの査読付ジャーナル *Maps in History* に公表することができた(No.54, 2016, pp.12-14)。さらに研究代表者は、2017年7月にリオデジャネイロで開催予定の第25回ICHST(国際科学技術史会議)での地理学史コミッションのセッションの一つ“ Geography as an International Science: Historical Perspectives and Present Challenges ”に、コンビーナの一人であるマドリッド・カルロス3世大学のハコボ・ガルシア=アルヴァレス(Jacobo Garcia-Alvarez)教授から招請され、“ expected participants ”の一人としてファーストサーキュラーに名を連ねることになった。同セッションのテーマは、まさに前述の2015年の論文の延長線上に位置するものであり、研究代表者はその先駆性を評価されて同セッションに招請されたのであった。かかる近年の研究活動の帰結として研究代表者は、地理学と国際主義の偶有的接合を時空間的変異に配慮しつつ検討するという研究課題をもって、今般の科研費に応募する決意を固めたのである。

2. 研究の目的

地理学は、グローバルな地球理解とローカルな地域理解の二側面をもつ知的行為として構築されてきた極めて長い過去を有する。この過去は、地理学と国際主義が接合した素因とみなしうるが、動因として想定されるのは地球全体を覆う国家群システムの発達である。近年の地理学史研究では、地理学の外貌や内実が国家の痕跡がいかに刻み込まれていったかを、時空間的多様性を考慮しつつ再審に付す研究が主流となっている。この流れを受けて本研究では、ヨーロッパと日本を対象として、地理学と国際主義がいかなる形でどのように接合し、その結果、いかなる意義を有する知と実践、及び空間がどのように形成されていったのか、それらの時空間的な共通性と差異はいかなるものであったのかを解明したい。

3. 研究の方法

本研究は以下の4つの方法に基いて進められた。ウェブ検索に基く文献・資料・画像等の収

集と分析。 国内・国外の諸機関の直接訪問に基く文献・資料・画像等の収集と分析。 国外でのフィールドワーク(写真撮影など)に基く画像等の収集と分析。 国際学会での発表とディスカッションに基く研究内容のブラッシュアップ。これら ~ の方法を組み合わせ、より良い研究成果の公表へとつなげた。

4. 研究成果

本研究では全体として、地理学と国際主義との接合が全くの必然でもなければ全くの偶然でもなく、近世から近代にかけての主権国家体制の形成の中で時空間的な多様性を有しつつ展開してきたことが明らかになった。各年度の具体的な研究成果は以下の通りである。

2017年度は広義の地理学と国際主義との関連を探るべくブルージュ、ブリュッセル、ロンドン、パリにおいて史資料の収集を行った。特にブリュッセルでは、国際主義者ポール・オトレが構想した国際博物館「ムンダネウム」と、オトレ自身の地理思想の関わりを示す史資料を収集できた。また、7月にリオデジャネイロで開催された第25回 ICHST(国際科学技術史会議)でのセッション“Geography as an International Science: Historical Perspectives and Present Challenges”に招待され、“Personified Continents in Public Places: Art, Internationalism and Geography in Late Nineteenth Century Paris”と題する発表を行った。また、これに先立って5月に幕張メッセで行われた日本地球惑星科学連合のJpGU-AGU Joint Meetingで「エアフルト大学ゴータ研究図書館のエドムント・ナウマン関係資料(The Edmund Naumann documents in the Gotha Research Library at the University of Erfurt)」と題する発表も行った。なお、リオデジャネイロでのマクシミリアン・ゲオルク(Maximilian Georg)氏の発表“‘Our Field is the World’: Geographical Societies in International Comparison, 1821-1914”に触発され、それが所属先のライプニッツ地誌学研究所(Leibniz-Institut für Länderkunde)の研究プロジェクトによるものであり、そこではアジアの地理学協会が未検討である旨を聞き、“A Whole New Field of Chigaku: The Tokyo Geographical Society in a World History Perspective”と題する発表を2018年のケベックシティにおけるIGU地域会議で行うべくアブストラクトを投稿して受理された。

2018年度は7月にケベックシティに出張し、IGU地域会議において前述のアブストラクト“A Whole New Field of Chigaku: The Tokyo Geographical Society in a World History Perspective”の内容を発表した。8月末から9月上旬にパリ・ロンドン・ブリュッセルに出張し、国際主義と地理学の関連について資料収集を行った。また、戦後日本の人文地理学・地理学史・地誌学・地理教育の展開に関して、国際的な状況も視野に入れつつ共著のレビュー論文を『地学雑誌』に発表した(127-6, 2018, pp.835-860)。国際学会発表のアブストラクトについては、2019年7月のIGU地理学史コミッションの国際シンポジウム(ダブリン)に向けた“Exhibiting a Liberal Internationalism: Paul Otlet, Mundaneum and Geography in Early Twentieth Century Brussels”, 同月の第28回 ICHC(アムステルダム)に向けた“Learning Mercator through Arrowsmith: The Earliest Printed Japanese World Map on the Mercator Projection”がそれぞれ受理された。また、第25回 ICHSTでの発表“Personified Continents in Public Places: Internationalism, Art and Geography in Late Nineteenth Century Paris”を、Springer社から刊行予定のセッション関連書にフルペーパー化して寄稿しピアレビューが進行中である。これに関連して、3月にライプニッツ地誌学研究所(ライプツィヒ)のセミナーで“The History and Geography of the Tokyo Geographical Society (1879-2019)”と題する報告を行い、研究情報を交換した。ミュンヘンではバイエルン州立図書館・ミュンヘン市公文書館等で資料収集を行った。

2019年度は、7月にダブリンでのIGU地理学史コミッションの国際シンポジウム“Geographies of Identities and Imaginations”において、アブストラクト“Exhibiting a Liberal Internationalism: Paul Otlet, Mundaneum and Geography in Early Twentieth Century Brussels”の内容を発表した。また同月のアムステルダムでの第28回 ICHCにおいて、アブストラクト“Learning Mercator through Arrowsmith: The Earliest Printed Japanese World Map on the Mercator Projection”の内容を発表した。このうち、前者のダブリンでの発表は近代における地理学と国際主義の関係性を、後者のアムステルダムでの発表は近世における地理学と国際主義の関係性を論じたものである。また、レッツェで2020年5月末に開催予定のIGUテーマ会議“Heritage Geographies: Politics, Uses and Governance of the Past”における地理学史コミッションのセッション“Southern Thinking: Heritage, Migration and Mediterranean Cultures”で発表すべく、“Archiving the landscapes of the nineteenth century world: Marianne North and ‘more-than-botanical’ art”と題するアブストラクトを投稿して受理された。3月には、ロンドン(王立キュー植物園・英国図書館)とブリュッセル(ベルギー王立図書館)において補足的な資料収集を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症の拡大により出張を取り止めた。

2020年度はコロナ禍で思うような研究活動ができない面も多々あり、レッチェで5月末に開催予定であったIGUテーマ会議“Heritage Geographies: Politics, Uses and Governance of the Past”は2021年度に延期された。その一方で、論文“Personified Continents in Public Places: Internationalism, Art, and Geography in Late Nineteenth Century Paris”を単行書(Schelhaas, B. et al. eds., *Decolonising and Internationalising Geography: Essays in the History of Contested Science*, Springer Nature)のチャプタとして公表し、国際発信を行うことができた。この論文は早くも同じ2020年刊行の*Mitteilungen der Österreichischen Geographischen Gesellschaft*(162. Jg.)における掲載論文(Mattes, J., Imperial Science, Unified Forces and Boundary-Work: Geographical and Geological Societies in Vienna (1850–1925), pp.155-210)に引用された。さらに、上記単行書と同じSpringer Nature社から刊行予定の別の単行書(地理学協会の世界史に関するもの)に、“A Whole New World of Chigaku: Earlier Developments in the Tokyo Geographical Society, 1879-1900”と題するチャプタを寄稿すべく執筆中である。

2021年度は国際主義の多様な展開と地理学との関連についての研究を継続し、5月にはオンラインで開催されたIGUテーマ会議“Heritage Geographies: Politics, Uses and Governance of the Past”において、アブストラクト“Archiving the landscapes of the nineteenth century world: Marianne North and more-than-botanical art”の内容を発表した。その要旨は同会議のプロシーディングスに掲載され(*Heritage Geographies: Politics, Uses and Governance of the Past*, Università del Salento, Lecce, 2021, 261-263), doiを付与してウェブで公表された(DOI: 10.1285/i26121581n3p261)。また、ライプニッツ地誌学研究所が企画した地理学協会(Geographical Societies)の世界史に関する編著書(Springer Nature社から刊行予定)に寄稿を求められていたが、これに“A Whole New World of Chigaku: Earlier Developments in the Tokyo Geographical Society, 1879-1900”と題するフルペーパーを寄稿し、ピアレビューを受けているところである。また、関連する業績として『科学史事典』に「科学の地理学 科学知識の空間性」を寄稿した。

2022年度は、コロナ禍の影響もあり、2021年度の研究費補助金に33,617円の残額が生じたため、国際主義の多様な展開と地理学との関連についての研究を継続することに使用した。年度末には、2023年6月にミラノで開催予定のIGUテーマ会議“The Ocean and Seas in Geographical Thought”における地理学史コミッションのセッション“Liquid Worlds: Historical Geographies and Cartographies of the Sea”での発表を目指して、“Representing a maritime empire: allegorical artworks at the East India House in London, 1729-1799”と題するアブストラクトを投稿した。これは幸いにも受理されたが、その準備のための資料収集にも残額を使用した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Shimazu Toshiyuki	4. 巻 Part of HIGEGE book series
2. 論文標題 Personified Continents in Public Places: Internationalism, Art, and Geography in Late Nineteenth Century Paris	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Schelhaas B., Ferretti F., Reyes Novaes A., Schmidt di Friedberg M. (eds) Decolonising and Internationalising Geography. Historical Geography and Geosciences. Springer, Cham.	6. 最初と最後の頁 81-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/978-3-030-49516-9_8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 島津俊之	4. 巻 72巻2号
2. 論文標題 [書評] 『現代地政学事典』編集委員会編（人文地理学会編集協力）『現代地政学事典』丸善出版，2020年	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文地理	6. 最初と最後の頁 174-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4200/jjhg.72.02_174	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 島津俊之	4. 巻 72巻3号
2. 論文標題 2019年学界展望 総説	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文地理	6. 最初と最後の頁 211-214
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4200/jjhg.72.03_211	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 島津俊之	4. 巻 71巻3号
2. 論文標題 [書評] Royal Botanic Gardens, Kew “Marianne North: The Kew Collection.” Kew Publishing, 2018	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人文地理	6. 最初と最後の頁 334-335
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4200/jjhg.71.03_334	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 東京地学協会日本地学史編纂委員会（黒田和男・加藤茂生・加藤茂・島津俊之・須貝俊彦・矢鳥道子・山田俊弘・八耳俊文）	4. 巻 127
2. 論文標題 戦後日本の地学（昭和20年～昭和40年） その6 「日本地学史」稿抄	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地学雑誌	6. 最初と最後の頁 835-860
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5026/jgeography.127.835	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 島津俊之	4. 巻 69-2
2. 論文標題 [書評] 山田俊弘著『ジオコスモスの変容 - デカルトからライプニッツまでの地球論 - 』勁草書房, 2017年	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 人文地理	6. 最初と最後の頁 258-259
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4200/jjhg.69.02_258	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件/うち国際学会 6件）

1. 発表者名 Shimazu Toshiyuki
2. 発表標題 Archiving the landscapes of the nineteenth century world: Marianne North and more-than-botanical art
3. 学会等名 IGU Thematic Conference “Heritage Geographies: Politics, Uses and Governance of the Past,” University of Salento, Lecce, Italy (online) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 SHIMAZU Toshiyuki
2. 発表標題 Exhibiting a liberal internationalism: Paul Otlet, Mundaneum and geography in early twentieth century Brussels
3. 学会等名 International Symposium on the History of Geographical Thought “Geographies of Identities and Imaginations,” University College Dublin, Dublin, Ireland (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SHIMAZU Toshiyuki
2. 発表標題 Learning Mercator through Arrowsmith: The Earliest Printed Japanese World Map on the Mercator Projection
3. 学会等名 28th International Conference on the History of Cartography, Koninklijk Instituut voor de Tropen, Amsterdam, The Netherlands (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SHIMAZU Toshiyuki
2. 発表標題 A Whole New Field of Chigaku: The Tokyo Geographical Society in a World History Perspective
3. 学会等名 International Geographical Union Regional Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 島津俊之 (Shimazu, Toshiyuki)
2. 発表標題 エアフルト大学ゴータ研究図書館のエドムント・ナウマン関係資料 (The Edmund Naumann documents in the Gotha Research Library at the University of Erfurt)
3. 学会等名 JpGU-AGU Joint Meeting 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Shimazu, Toshiyuki
2. 発表標題 Personified Continents in Public Places: Art, Internationalism and Geography in Late Nineteenth Century Paris
3. 学会等名 25th International Congress of History of Science and Technology (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Elena Dell ' Agnese and Fabio Pollice (eds)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Universita del Salento	5. 総ページ数 402
3. 書名 Heritage Geographies: Politics, uses and governance of the past (Shimazu Toshiyuki, Archiving the landscapes of the nineteenth century world: Marianne North and more-than-botanical art, 261-263, doi: 10.1285/i26121581n3p261)	

1. 著者名 日本科学史学会編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 726
3. 書名 科学史事典 (島津俊之, 科学の地理学 科学知識の空間性 , 264-265)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------